

地域ボランティアプログラム① 松木日向緑地プログラム

竹林整備 &事後学習

報告

2019/02/15

竹林整備 & 事後学習

■午前:「竹林整備」

2月15日(金)の午前中、本学の敷地内にある松木日向緑地にて、9人の学生が参加し、竹林整備を行いました。年度を通して取り組んできた本プログラムですが、雨天により延期となった「里山保全ボランティア~首都大で竹を切ろう!~」を除き、今回が今年度最後の活動となりました。

今回の活動では、3 人ずつチームを組み、竹の伐採を行いました。最初は自分の背丈の何倍もある竹の伐採に苦戦していたプログラム参加1年目の学生たちも、これまで連携団体である「ひなた緑地遊学会」の方々に教えていただいたり、試行錯誤しながら竹の伐採をしたりしてきた経験を経て、今では安全に適切にそしてスムーズに竹の伐採を行うことができます。

竹を切り倒したり、枝を落としたり、運びやすい長さに切り分けたりといった一連の作業に 黙々と取り組んだことで、これまでより多くの陽 の光が差し込むようになりました。



■午後:「事後学習」

午後は、牧野標本館別館にて「事後学習」を実施しました。

この「事後学習」では、これまでの活動を振り返り、他のメンバーと共有することで、自分自身の想いと向き合ったり、多角的な視点からボランティア活動の効果と意義を考えたりすることで、活動を学びと成長につなげることをねらいとしています。

本プログラムのアドバイザーである加藤英寿 先生(理学部生命科学科 / 牧野標本館 助教)や連携団体である「ひなた緑地遊学会」代表の北出進さん、サル山水合戦にご参加いただいた愛宕小学校学校運営協議会の貴家由美子さん、松木日向緑地を管理する本学総務部施設課職員の方にもお越しいただき、学生の振り返りにご参加いただきました。

・「ココロ(キモチ)」の振り返り

「ココロ(キモチ)」の振り返りとして、感情面の振り返りを行いました。最初に、活動の中で "最も感情が動いた場面"を各自で考え、その 後、グループで共有しました。

学生からは、「普段あまり関わりがない子どもたちとの交流が楽しかった」「竹の成長スピードやその高さ・長さに圧倒された」「竹の間伐を行った後に、陽の光が緑地に差し込み、目に見えて効果を実感することができた」等の声を聞くことができ、様々な場面で学生がポジティブな感情になっていたということが分かりました。

一方で、「竹を上手く切れずに苦労した」「参加してくれた小学生や中学生とうまく関われなかった」等、普段の生活ではあまり経験しないような場面で思い通りにいかず苦労し、ネガティブな感情になったこともあったようでした。

ポジティブ・ネガティブといったそれぞれの感情から振り返ることで、一つひとつの活動に対する自分の気持ちと向き合うことができました。

・「アタマ」の振り返り

次に、「アタマ」の振り返りとして、今回取り組んだボランティア活動の効果・意義について各自で考え、その後、グループで共有しました。

さらに、そこで挙げられた効果・意義を①ボランティア自身、②課題の当事者・活動の対象、③活動する組織、④地域・社会、といった対象別に分けて可視化しました。

【①:ボランティア自身にとって】

- ・里山や竹について知り、自然環境を理解する ことができる。
- ・運動不足やストレスの解消になる。
- ・普段できないような体験ができる。
- ・自分の学部・専攻を活かすことができる。
- ・自分の成長につながる。

【②:活動の対象にとって】

<緑地にとって>

- ・緑地に陽の光が差し込むようになる。
- ・竹の再利用・利活用ができる。
- ・生物の多様性を高めることができる。 〈参加した子どもたちにとって〉
- ・室外で遊んだり、自然と触れ合ったりする楽し さを子どもたちが知る機会になる。
- ・異学年の子どもが一緒に活動することができ た。
- ・小学生が未来の自分(大学生)を想像することができる。

【③:活動する組織(連携団体や近隣の小学校、首都大)にとって】

- ・小学校同士(子どもや保護者、教員等)の交流ができる。
- ・竹を小学校の運動会の棒引きで活用した。
- ・組織同士の交流がお互いにとって良い刺激になる。
- ・若者のフレッシュな力で、今までになかったモノが生まれ(ノウハウ・知識等)、活動の幅が広がる。
- ・里山保全活動の技術を若い世代に伝承することができる。

【④:地域・社会にとって】

- ・様々な生物が住みやすい環境をつくることができる。
- ・人と人のつながりをつくることができる。
- ・社会課題が他人事から自分事になる。
- ・地域と大学のつながりを育む。
- ・里山や生態系の保全に関する課題を把握し、共有することができる。
- ・親子で参加したり、地域の人々が集ったりする等、多世代交流ができた。

・プログラムの修了

事後学習の最後には、プログラムを修了した学生一人ひとりに修了証をお渡ししました。希望者は、2年目は「サポーター」、3年目は「リーダー」として、次年度もプログラムの活動を継続することができます。

活動を継続しない学生や卒業により首都大を離れる学生も、ボランティアプログラムでの学びをこれからの自分の生活や将来に生かしていっていただければと思います。